

かすみ堤

—江戸時代の洪水対策—

片貝川河口
(落合橋より)



片貝川
かすみ堤
持光寺地内

片貝川は魚津市の最北部、黒部市との境界付近で海へ到着します。河口付近になると流れがだいぶ緩やかになり、上流の黒谷から青柳地域にかけての、円筒分水などの利水施設付近でみられた石ころがゴロゴロと転がっていた河原から、砂と上流よりも小さめの石ころからなる河原に変化してきます。また、川には砂や礫でできた中州も見られるようになります。しかし、一般的な河川の下流部と比べると、水深は浅く、流速は速いなど、河口でも急流河川の特徴を示しています。

海に一番近い落合橋付近で片貝川は布施川と合流します。もともとこの2つ河川はそれぞれ独立した河川でした。しかし、鎌倉時代末の嘉暦2（1327）年（今から684年前）におこった大洪水によって片貝川の流路が大きく北へ移動し、布施川の流路を奪い現在のよう姿になったそうです。流路が北へ移動する前は、片貝川は片貝川扇状地のほぼ中央部を流れ、現在の河口よりも南の経田西町～仏田地域付近で海へ流れ出ていたと考えられています。

たびたび起こる洪水による災害を少しでも減らすために、片貝川では古くから堤防工事が行われていました。特に江戸時代にはしっかりした工事を行った記録が残っています。今も、片貝左岸に残る「かすみ堤」はその当時のものと思われます。

かすみ堤は、片貝川の東山地内や同じ急流河川である早月川の流域にも残っています。

いまでは、災害の少ない土地といわれる富山県ですが、先人の知恵と工夫によってきずかれたものであることを改めて感じるものです。

- ・ 駐車場 落合橋そばの河原など
- ・ トイレ 経田海浜公園にあり
- ・ 「かすみ堤」 短い堤防が2重になるよう作られ、洪水時には堤防と堤防の間に水を一時的に逆流させ、その後自然に水を本流に戻す仕組み。